



『未病』のときから...

足病科外来の服部香里でございます。
予防医学（未病）をテーマに連載させていただきます。
初回は、**メディカルアロマテラピー**についてです。
『香りで心と体を治療する』それがヨーロッパのメディカルアロマテラピーです。
香りという日本では、どうも、イメージとして癒し療法ととらえられがちです。それには色々問題があります。私が学んだフランス、ドイツでは、治療として薬と同じ扱いで処方箋を出しています。ドイツはアポテーケという調剤薬局でお出ししています。日本ではどうでしょう。雑貨扱いのため、酷いのは100円ショップでも売られているのが現状です。しかし、この10年から15年の間に認知はされつつありますが、メディカルアロマテラピーとしては、正しい情報が流通していないのが悲しい現状です。
そもそも、アロマテラピー（Aromatherapy）とは芳香植物から抽出された100%天然の精油（エッセンシャルオイル）を使って心身の病を治癒させる方法です。この香りの元となるのは、アルコール、エステル、アルヒド、ケトン等、芳香物質で精油という名前なので油と思われがちですが、名前に反して脂質はまったく含まれておりません。昔々、化学的に作られた医薬品がなかった時代に、人は、植物に含まれる成分を病気の治療薬として使っていたことはみなさんご存じの事ですね。たとえば・・・菖蒲祭り・・・菖蒲湯に入ると1年中無病息災、アロエは別名、医者いらずと言われる程ですし、ドクダミやカミツレなどもおばあちゃんの知恵袋的に、生活の中で使われ、伝えられている訳です。アロマテラピーの歴史を辿りますと、フランスの化学者『ルネ・モーリス・ガットフォセ』という方が、化粧品の研究、実験中に火傷を負いましたが、その時に、近くにあったラベンダーを塗り化膿もせず、ケロイドにもならず治癒した事がきっかけで、その後懸命に精油の研究をされました。その実績を引き継がれたのが、フランス人医師のジャン・バルネ博士です。それが、アロマテラピーの基礎であり、1960年代にヨーロッパ各地に波及、発展していきました。私も度重なる大病の経験からこの道を志、フランス、ドイツで学ぶ事ができました。

そのジャン・バルネ博士の愛弟子より、メディカルアロマテラピーを学び、その後、フットケアに魅せられたのもその頃です。フランス、ドイツでは、徹底したメディカルアロマテラピーが浸透し、植物療法とともに、医療行為として、国内の情勢が破綻するまでは保険診療として認められておりました。ベルギーでは、現在も、25種類の精油のみ保険適用されています。ドイツでも精油は保険適用ですが、フランスやベルギーのように成分分析を重視せず、精油の香りそのものを重要視した考え方で行われています。それは、ドイツが、水療法（クナイプ）やタラソなどを活用した本格的な自然療法が、非常に充実し、伝統的なお国からでしょうか？ドイツには、ハイルプラクティカーという国家資格があり、お産、歯科治療、手術以外は、すべて治療する事が出来ます。そのドクターは、西洋医学のドクターと並んで開業されています。本当に、世界の事情は色々で、とても興味深いものです。日本では、ブームとしてお遊び的に進展してしまったアロマテラピーですが、現在は、病院でも活用して下さっている所も増えております。

最後に・・・当院では、アロマテラピー（精油）を使用して患者さまのケアをさせて頂いて今年で18年になります。（加登病院時代から）

加登理事長が20年前に私に話された言葉がございます。

西洋医学に勝るものはない！
なってしまった病気を治すのは西洋医学しかないけれど、それを助ける方法として、色々な治療法があってもいいじゃないか！

それが、漢方であれ、鍼であれ、お灸であれ、アロマテラピーであれ！患者さまが喜んでくださるなら何でもやっていこう！僕が全責任をとるから、患者さまが喜んでくださるなら、アロマテラピーをどんどんやっていきなさい！このお言葉に感銘を受けて・・・はや20年の月日が過ぎ去ろうとしています。これからも、患者さま、ご家族さまが喜んでくださる事を、全力で実行していきたいと思っております。当院に来院して下さっている患者さまのお顔を思い浮かべながら今回のコラムのペンを置きます。